

1980年代以前のニホンヤマビルの分布

誌名	日本森林学会誌
ISSN	13498509
著者名	逢沢,峰昭 森嶋,佳織
発行元	日本森林学会
巻/号	100巻2号
掲載ページ	p. 65-69
発行年月	2018年4月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



1980 年代以前のニホンヤマビルの分布

逢沢峰昭^{*1}・森嶋佳織²

1990 年代以降、ニホンジカなどの増加と相まって、全国的にニホンヤマビルの分布拡大や吸血被害の増加が問題化している。被害対策を検討する上で、増加しているニホンヤマビルが昔はどこにいたのか、といった過去の分布情報は重要である。しかし、過去のニホンヤマビルの全国的な分布を扱った研究は少なく、特に 1945 年以前の分布情報は乏しい。本研究では、学術文献、紀行文および山岳書を基に、江戸時代中期から 1945 年までと、1946 年からニホンヤマビルの分布拡大が生じる以前の 1980 年代までの二つの年代における全国のニホンヤマビルの分布情報を整理し、現在の分布と比較した。その結果、ニホンヤマビルは、東北地方、中部地方、紀伊半島および九州の一部の限られた山岳地に 1945 年以前から分布し続けていた。一方、九州の英彦山や伊豆の天城山のように、明治中期以降にニホンヤマビルがみられなくなった山岳もあることが示唆された。

キーワード：1945 年、分布図、*Haemadipsa japonica*、陸生ヒル、紀行文

Mineaki Aizawa,^{*1} Kaori Morishima² (2018) Distribution of *Haemadipsa japonica* in Japan before the 1980s. J Jpn For Soc 100: 65-69 Since the 1990s, the range of the land leech *Haemadipsa japonica* has expanded to include areas of human activity, possibly due to increases in mammalian populations, which has become a problem in several Japanese prefectures. Knowledge of the origins and past distributions of the currently expanding populations of *H. japonica* is imperative to the successful implementation of countermeasures. Although previous studies have examined past distributions, much knowledge is still lacking, especially prior to 1945. Here, we surveyed past distributions of *H. japonica* based on academic and mountaineering literature in addition to travelers' journals published between the mid-Edo era (the 1770s) and the 1980s, prior to their range expansion. We reconstructed the distributions of this species for two periods: between the 1770s and 1945 and between 1946 and the 1980s, and compared the reconstructed distributions to the present distribution. Our results showed that *H. japonica* has been found in mountainous areas in parts of Tohoku, Chubu, Kii peninsula, and Kyushu since before 1945. In contrast, populations from Mt. Hikosan, Kyushu, and Mt. Amagi, Izu, may have disappeared before the mid-Meiji era.

Key words: 1945, distribution map, *Haemadipsa japonica*, land leech, travelers' journal

I. はじめに

環形動物門環帯綱ヒル亜綱のヒル下綱に属する分類群をヒル類といい(中野 2013)、このうち陸上生活に適応し、吸血性を持つものを陸生ヒルと呼ぶ(Lai *et al.* 2011)。日本にはニホンヤマビル(*Haemadipsa japonica*)とサキシマヤマビル(*H. rjukjuana*)の 2 種の陸生ヒルが分布する。サキシマヤマビルがトカラ海峡以南の南西諸島のほか南アジアに広く分布するのに対して、ニホンヤマビルは日本固有で秋田県から屋久島までの本州、四国、九州に分布する唯一の陸生ヒルである(Oka 1910; Borda and Siddall 2011; Lai *et al.* 2011)。かつてニホンヤマビルの分布は山中や渓谷の湿った場所に限定されていた(Whitman 1886; 飯島 1887; 佐々木 1904)。しかし、1990 年代以降、ニホンジカなどの大型哺乳動物の増加と相まって全国的にニホンヤマビルの分布域が広がり、吸血被害が増加している(山中 1999; 神奈川県ヤマビル対策共同研究推進会議 2009; 杉山・坂庭 2010)。

ニホンヤマビルの被害対策などを検討する上で、近年の分布拡大が昔からいた集団を核として生じたのか、隣接県などから広がってきたのか、といった過去の分布情報は重要である。(岩見・高橋 2009; 杉山・坂庭 2010)。現在のニホンヤマビルの分布については、ヤマビル研究会(2017)

の詳細な情報が公開されているが、ニホンヤマビルが増加し始める 1980 年代以前の分布に関する情報は、大野(1983)のニホンヤマビルに関連する文献目録、大野(1983)を基にした日本野生生物研究センター(1989)の分布図、およびこの分布図に若干の分布情報を加えた吉葉(1994)の分布図があるのみである。しかし、大野(1983)はニホンヤマビルに関する 117 文献を挙げているが、このうち具体的な産地情報があるものは 57 文献で、このうち 1945 年以前の分布情報は 19 文献と少ない。したがって、特に 1945 年以前の文献についてはさらなる収集が必要と考えられる。また、日本野生生物研究センター(1989)と吉葉(1994)の分布図は、1886 年(Whitman 1886)から 1980 年代までの分布情報を 1 枚の図に示したものであるが、年代を複数に区分して分布図を作成することで、過去のニホンヤマビルの分布地の変化に関する知見が得られる可能性がある。

ニホンヤマビルによる吸血は人の印象に残ることから、古くからしばしば書物に登場する。江戸時代の大和本草(貝原 1709)や倭訓栞(谷川 1830)では、山中において血を吸うものとして、草蛭、山蛭、または木蛭などの名で記述がある。また、明治以降は、学術書(例えば、Whitman 1886 や飯島 1887)のほか、深田久弥などの著名な登山家の大正期や昭和初期の山岳紀行文(例えば、深田 1982)中にもしばしば「山蛭」に吸血された記述がある。上述の

*連絡先著者 (Corresponding author) E-mail: aizawam@cc.utsunomiya-u.ac.jp

¹ 宇都宮大学農学部森林科学科 〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350 (Department of Forest Science, Faculty of Agriculture, Utsunomiya University, 350 Mine-machi, Utsunomiya, Tochigi 321-8505, Japan)

² 東京農工大学大学院連合農学研究科環境資源共生科学専攻 〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町 350 (Department of Symbiotic Science of Environment and Natural Resources, United Graduate School of Agricultural Science, Tokyo University of Agriculture and Technology, 350 Mine-machi, Utsunomiya, Tochigi 321-8505, Japan)

(2017 年 12 月 14 日受付: 2018 年 1 月 28 日受理)

ように、ニホンヤマビルは秋田県から屋久島にかけて分布する唯一の陸生ヒルであることから、これらの「山蛭」は、水田などに分布して人に対する吸血性をもつスズメヒル (*Hirudo nippon*) や、非吸血性で扁形動物のコウガイビル属の仲間との誤認でない限り、ニホンヤマビルと判断できる。ただ、紀行文など学術書でない文献中のニホンヤマビルの記載については、伝聞が多かれ少なかれ誇張されている可能性など、科学的資料としては客観性に乏しいものも含まれる可能性がある。しかし、これらの文献に陸生で吸血性に関する記述があるか、文献に記載された分布地に現在ニホンヤマビルが分布するか、などについて検討することで、分布情報として利用可能と考えられる。

本研究では、学術書のほか紀行文、山岳書を調べ、江戸時代中期 (1770 年代) から 1945 年までと、1946 年からニホンヤマビルが増加し始める前の 1980 年代までの二つの年代におけるニホンヤマビルの分布について整理し、現在の分布と比較することを目的とした。

II. 調査地および調査方法

大野 (1983) のうち、旧国名 (遠江, 美濃など) 以下の具体的な地名情報を含むものは 57 文献である。この中で情報の重複した文献 (同一著者が近い年代に複数の文献に同じ情報を記したのものや、同一の報告書内の情報) を除くと 52 文献である。このうち、入手あるいは閲覧可能であった 51 文献について記載を再確認した。さらに、紀行文および山岳書を渉猟して、ニホンヤマビルに関する記述を探索・整理した (表-1)。得られた情報を基に、江戸時代中

期 (1770 年代) から 1945 年までと、1946 年から 1980 年代までの二つの年代に分けて分布図を作成し、考察において現在の分布地 (ヤマビル研究会 2017) と比較した。また、分布図作成に際して、文献の信頼性については、陸生で吸血に関する記載があるか、もしくはなくても分類学的記載、ヤマビルの図ないし写真、あるいは生態的記載 (人への吸血行動など) からニホンヤマビルと判断できるもの (図-1 凡例黒丸) と、文献には種名または地名しか記載はなく、吸血に関する記載はないが、ヤマビル研究会 (2017) の現在の分布情報から判断して、ニホンヤマビルと判断できるもの (図-1 凡例白丸) の二つに分けて示した。そして、同一分布地に複数の情報がある場合は信頼性の高い前者で示した。また、「絶滅した」あるいは「昔はみられたが今はみられない」といった情報については、別途分布図中に示した (図-1 凡例バツ印)。さらに、Nakano and Ito (2011) が東京大学で行ったヒル類の標本調査の結果も利用した (図-1 凡例黒四角)。これ以外に、当該地域の動物目録にヤマビルという記載があるだけで、現在その地域附近 (同一の町村または旧町・村) ではヤマビルがみられない分布地については、検討の必要な分布情報として別途電子付録表-1 にまとめた。

III. 結果と考察

本調査の結果、1945 年以前のニホンヤマビルの分布情報として、大野 (1983) の 19 文献に、新たに 14 文献 (うち 12 文献は紀行文) を追加できた。本調査で明らかになった最も古いニホンヤマビルの分布に関する記載は、本朝奇

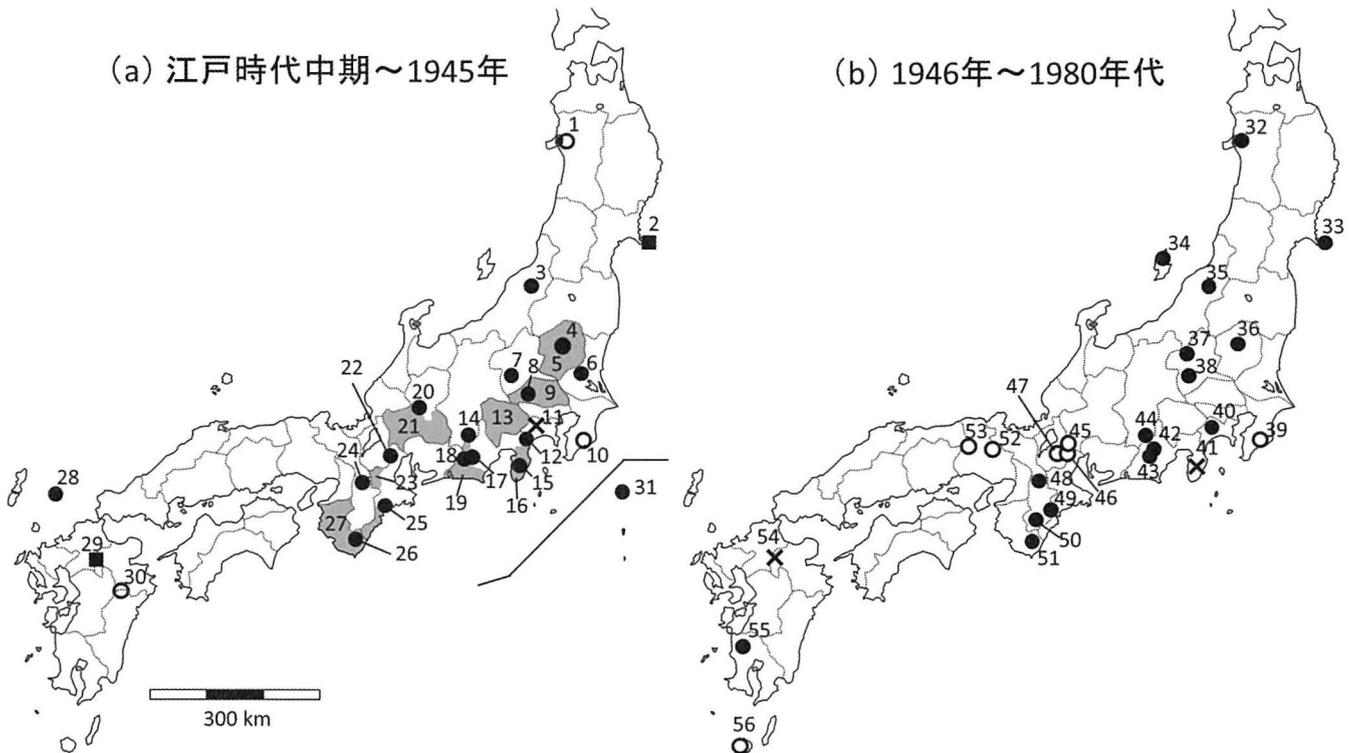


図-1. 江戸時代中期 (1770 年代) から 1945 年 (a) と 1946 年から 1980 年代 (b) の二つの年代におけるニホンヤマビルの分布
 凡例の●は、陸生で吸血に関する記載があるか、もしくはなくても分類学的記載、ヤマビルの図ないし写真、あるいは生態的記載からニホンヤマビルと判断できる分布地。○は、文献には種名あるいは地名のみの記載しかなく、吸血に関する記載はないが、ヤマビル研究会 (2017) の現在の分布情報から判断して、ニホンヤマビルと判断できる分布地。×は「絶滅した」あるいは「昔はみられたが今はみられない」といった記載があった分布地。■は Nakano and Ito (2011) の標本情報に基づく分布地である。(a) における灰色の塗りつぶしは、旧国名で記された産地を表す。各番号は表-1 と対応している。

表-1. 1980年代までのニホンヤマビルの分布地と出典文献一覧

番号	地名	現在の分布	文献
1	秋田県南秋田郡	+	佐藤 (1940)
2	宮城県金華山島	+	Nakano and Ito (2011)*1
3	新潟県村松	+	中村 (1925)
4	栃木県日光	+	秋山 (1914); 伊藤 (1942)
5	下野国	+	内田・小野 (1915)
6	茨城県筑波山	-	恵利 (1925); 畠山 (1959)
7	群馬県妙義山	+	岡本 (1995)
8	武州秩父	-	秋山 (1914)
9	武蔵国	-	内田・小野 (1915)
10	千葉県安房郡	+	千葉県安房教育会 (1926)
11	神奈川県丹沢山塊	+	塚本 (1944); 武田 (1952)
12	神奈川県箱根(すべり山)*2	-	Whitman (1886); 飯島 (1887); 秋山 (1914)
13	甲斐国	+	内田・小野 (1915)
14	長野県遠山川便ヶ島, 北又度	+	黒田 (1929); 伊藤 (1942); 冠 (1979); 深田 (1982)
15	静岡県天城山	-	植村 (1774); 小野 (1805); Whitman (1886); 飯島 (1887); 白柳 (1914)
16	伊豆国	-	安積 (1841); 内田・小野 (1915)
17	静岡県京丸	+*3	伊藤 (1942)
18	静岡県秋葉山	+*3	華誘 (1798); Whitman (1886); 飯島 (1887); 民友社 (1902)
19	遠江国	+	秋山 (1914)
20	岐阜県竜ヶ峰	-	遅塚 (1906)
21	美濃国	+	Whitman (1886); 飯島 (1887); 秋山 (1914)
22	滋賀県茨川	+	結城 (1944)
23	伊賀国	+	Whitman (1886); 飯島 (1887); 秋山 (1914)
24	奈良県春日山	+	恵利 (1925); 神戸・久米 (1939); 福岡 (1945)
25	紀州国間弓村唐子谷	+	植村 (1774)
26	和歌山県越前峠	-	西瀬 (1934)
27	紀伊国	+	秋山 (1914); 内田・小野 (1915)
28	福岡県沖ノ島	+	江藤 (1891)
29	福岡県・大分県英彦山	-	伊藤 (1942); Nakano and Ito (2011)*1
30	大分県・宮崎県祖母山	+	百溪 (1925); 伊藤 (1942)
31	東京都北碓黄島	-	Oka (1930)
32	秋田県阿仁又沢, 狙山ほか	+	岡 (1978); 岡ら (1981)
33	宮城県金華山島	+	西丸 (1966); 加藤・庄司 (1978)
34	新潟県佐渡島新潟大演習林	+*4	藤田 (1983)
35	新潟県村松, 川内山塊	+	亀田山岳会 (1981); 藤田 (1983)
36	栃木県日光市大原, 佐下部	+	渡辺 (1976)
37	群馬県四万川上流	+	徒登山山岳会・山の仲間山椒魚 (1981); 斉藤 (1982)
38	群馬県妙義山	+	里見 (1963); 西丸 (1966)
39	千葉県内浦山	+	渡辺 (1968); 大野 (1975); 大野 (1981)
40	神奈川県丹沢山塊	+	西丸 (1966); Keegan <i>et al.</i> (1968)
41	静岡県天城山	-	武田 (1952)
42	静岡県寸又川上西河内	+*5	倉田 (1973a)
43	静岡県前黒法師山	+	川崎 (1999)
44	長野県遠山川一帯, 光岳・南アルプス深南部	+	西丸 (1966); 溝江 (1982)
45	岐阜県烏帽子岳 (大垣市)	+	仙波 (1974)
46	三重県藤原岳・御池岳	+	角田 (1962)
47	滋賀県政所奥地 (箕川, 君ヶ畑, 蛭谷, 茨川)	+	結城 (1960)
48	奈良県春日山	+	畠山 (1959); 西丸 (1966)
49	奈良県・三重県大台ヶ原	+	西丸 (1966)
50	奈良県下北山村前鬼山	+	吉村 (1976)
51	和歌山県大塔山	+	後藤・真砂 (1971); 南紀生物同好会 (1979)
52	兵庫県神楽村奥, 倉町谷	+	松山 (1953)
53	兵庫県氷ノ山・後山・那岐山	+*6	川口 (1967)
54	福岡県・大分県英彦山	-	黒子 (1958)
55	鹿児島県紫尾山	+	倉田 (1973b)
56	鹿児島県屋久島	+	倉田 (1971)

地名番号は図-1の分布地番号と対応している。現在の分布はヤマビル研究会 (2017) の情報を基にした (+: 現在, 附近に分布する; -: 現在, 附近に分布なし)。*1 標本情報に基づく; *2 現在, 箱根にすべり山という山はない。明治期の地名調査や聞き取りを行ったが, 場所は特定できなかった; *3 旧春野町に現在分布がみられる; *4 旧相川町に現在分布がみられる; *5 川根本町に現在分布がみられる; *6 旧波賀町に現在分布がみられる。

跡談(植村 1774)であり、伊豆国の天城山、紀州国の間弓村唐子谷(現在の三重県大紀町唐子川)が挙げられていた。また、遠山奇談(華誘 1798)では秋葉山(静岡県旧春野町)、本草綱目啓蒙(小野 1805)および良齋問話(安積 1841)にも伊豆天城山、あるいは伊豆に「山蛭」が多いことが記されていた。これらには吸血に関する記載や吸血行動に関する生態が記載されている上、秋葉山や天城山についてはWhitman(1886)や飯島(1887)にも記載があり、かつ天城山を除いて、大紀町や旧春野町では現在もニホンヤマビルが分布している(ヤマビル研究会 2017)。これらから判断すると、これらの地域では、江戸時代中期にすでにニホンヤマビルの分布がみられたものと考えられる。また、本研究で見つかった紀行文や山岳書の記述から、明治21年6月26日の福岡県沖ノ島(江藤 1891)、明治39年頃の岐阜県竜ヶ峰(塚塚 1906)、大正3年8月の群馬県妙義山(岡本 1995)、大正8年夏の長野県遠山川便ヶ島(冠 1979)、昭和10年頃の8月14日の遠山川北又渡(深田 1982)といった具体的な年のニホンヤマビルの分布情報も得られた。これらの情報を基に作成した1945年以前の分布図を図-1(a)に示した。1945年以前の分布は、秋田県(南秋田郡)、宮城県金華山、新潟県(川内山塊)、中部地方の主として太平洋側、紀伊半島、九州(英彦山・祖母山)、福岡県沖ノ島であった(表-1)。これらの多くでは、現在も附近でニホンヤマビルの分布がみられる(表-1)。また、1946年以降の分布情報として、大野(1983)の32文献に、新たに5文献を追加して分布図を作成した(図-1(b))。1946年以降の分布地は概ね1945年以前の分布地と同じであり、そのほとんどにおいて、現在も附近でニホンヤマビルの分布がみられる(表-1)。佐渡島、兵庫県、鹿児島県紫尾山、屋久島などが新たな分布地として加わったが、このような分布地の増加は、山岳地の開発にともなうニホンヤマビルの生育地に人が入る機会が増えたことや、出版物による分布情報の発信機会の増加などによるものと考えられる。

一方で、本調査の結果、ニホンヤマビルが過去にみられなくなった地域があることも示唆された。一つは、福岡県英彦山である。東京大学には明治22年に福岡県英彦山で採取されたニホンヤマビルの標本がある(Nakano and Ito 2011)。昭和期の文献には「昔は多くの山蛭がいたそうだが(伊藤 1942)あるいは「往時は頂上近くにヤマビルがいて屢々吸血されたそうである(黒子 1958)」との伝聞の記述があるのみで、1946年以降に分布情報がなくなり(図-1(b))、現在も分布情報はない(ヤマビル研究会 2017)。したがって、英彦山のニホンヤマビルは昭和初期までにみられなくなったと考えられる。もう一つは伊豆の天城山である。過去に採取された標本がないことから、過去の分布を実証することはできないが、天城山のニホンヤマビルの分布は、上述のように江戸時代中期から文献記載がある。しかし、武田(1952)が、戦後、明治の中期以前まで山蛭で有名であった天城山でもほとんど耳にしなくなったことを記しているように、1946年以降に分布情報がなくなり(図-1(b))、現在も分布情報はない(ヤマビル

研究会 2017)。大正期に書かれた白柳(1914)の紀行文「天城を越ゆる記」中には、「昔は(ニホンヤマビルが)沢山居りました。山に限らず、娘達が麓で桑などを摘んで居りますと、何時の間にか手甲や脚絆の中へ潜り込んでキャツと云わせたものです。けれども近年路が開けてからはもう山の中には居なくなりました。(括弧内は著者ら注)」という馭者の言葉が記されている。このように、天城山ではニホンヤマビルは大正初期までにみられなくなったことが示唆される。

以上から、ニホンヤマビルは1945年以前から現在の分布地とほぼ重なる地域に分布し続けていることが明らかになった。一方、九州や伊豆の山岳のように明治中期以降にみられなくなった分布地があることも示唆された。

現在のヤマビルの分布については、ヤマビル研究会のWeb掲載情報を利用していただいた。また、文献・分布情報の収集に際し、宇都宮大学附属図書館、敦見和徳博士、中野隆文博士、大西毅正氏、足立 勲氏、八木 剛氏、箱根町郷土資料館のご協力をいただいた。以上の方々に、心よりお礼申し上げます。本研究は、科学研究費補助金(JP16K07768)を使用して行った。

引用文献

- 秋山蓮三(1914) 蛭類. (内外普通動物誌 無脊椎動物篇. 興風館) 990-1009
 安積良齋(1841) 良齋問話. 須原屋源助
 Borda E, Siddall ME (2011) Insights into the evolutionary history of Indo-Pacific bloodfeeding terrestrial leeches (Hirudinida: Arhynchobdellida: Haemadipsidae). *Invertebr Syst* 24: 456-472
 千葉県安房教育会(1926) 動植物. (安房郡誌. 安房郡教育会) 125-147
 塚塚麗水(1906) 飛騨越日記. 左久良書房
 恵利 恵(1925) 蛭類. (動物学精義各論(上). 目黒書店) 223-231
 江藤正澄(1891) 瀛津島紀行. 東京人類学会雑誌 69: 74-86
 藤田暉輔(1983) ヤマビル. (新潟県陸水動物図鑑. 新潟日報事業社) 182
 深田久弥(1982) 山岳展望. 朝日新聞社
 福岡五郎(1945) 衛生害虫に関する研究 X 奈良縣春日山に於ける山蛭の生理生態學的研究(豫報). 京都帝國大學理學部動物學教室・大津臨湖實驗所生理・生態學研究業績 (27): 1-6
 後藤 伸・真砂久哉(1971) 大塔山系のその他の動物. 大塔山の自然 (1): 38-39
 浜崎三郎(1964) 動物相・一般動物相目録. (見島総合学術調査報告書. 山口県教育委員会) 120-128
 島山久重(1959) ヒル(蛭). (あしあと. 島山久尚・島山幸久) 134-138
 平賀文男(1932) 動物. (八ヶ岳火山群. 木星社書院) 22-31
 飯島 魁(1887) *Haemadipsa japonica*. (人體寄生動物編. 丸善商社) 433-434
 伊藤拜山(1942) 山中の小動物記. (山の季節. 昭和書房) 124-131
 岩見光一・高橋成二(2009) 丹沢山地におけるヤマビルの生息分布と生育環境. 神奈川県自然環境保全センター報告 (6): 21-35
 貝原益軒(1709) 大和本草卷之十四. 永田調兵衛
 角田 保(1962) その他の特筆すべき動物. (北伊勢地方の自然. 三岐鉄道) 8
 亀田山岳会(1981) 川内山塊. (日本登山体系 2 南会津・越後の山. 柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編. 白水社) 302-319
 神奈川県ヤマビル対策共同研究推進会議(2009) ヤマビル対策共同研究報告書. 神奈川県
 神戸伊三郎・久米道民(1939) 春日山及び其の附近の動物. (春日山動植物大観. 神戸伊三郎・久米道民) 16-24
 冠松次郎(1979) 溪. 中公文庫
 加藤睦興雄・庄司定克(1978) 金華山島. (みやぎの自然. 宝文堂) 183-190
 川口四郎(1967) 後山・那岐山・黒岩高原の動物. (氷ノ山・後山・那岐山国定公園候補地学術調査報告. 日本自然保護協会) 135-141
 川崎精雄(1999) 山を見る日. 中央公論新社

- 華誘居士 (1798) 遠山奇談. 著屋甚助・銭屋利兵衛
- Keegan HL, Toshioka S, Suzuki H (1968) Blood sucking Asian leeches of families Hirudidae and Haemadipsidae. Bio-medical Reports of the 406 Medical Laboratory (16): 1-130
- 倉田 悟 (1971) タブノキ. (日本産樹木分布図集 I. 地球出版) 282
- 倉田 悟 (1973a) フジウメモドキ. (日本産樹木分布図集 IV. 地球出版) 146
- 倉田 悟 (1973b) オトコヨウゾメ. (日本産樹木分布図集 IV. 地球出版) 204
- 黒田正夫 (1929) 遠山川西澤より西澤岳へ登る. 山岳 23: 167-191
- 黒子 浩 (1958) 彦山の動物. (英彦山. 田川郷土研究会) 665-722
- 久呂保村誌編纂委員会 (1961) 動物. (村誌久呂保. 久呂保村誌編纂委員会) 79-83
- Lai YT, Nakano T, Chen JH (2011) Three species of land leeches from Taiwan, *Haemadipsa rjukjuana* comb. n., a new record for *Haemadipsa picta* Moore, and an updated description of *Tritetrabdella taiwana* (Oka). ZooKeys 139: 1-22
- 松山確郎 (1953) 水上郡動物雑記. 会誌 Natura (兵庫縣立柏原高等学校生物研究会) (9): 10-14
- 民友社 (1902) 蟻形動物. (家庭科学第一編 動物の話. 民友社) 123-135
- 宮下義貫 (1964) 上高井のひる類. (長野県上高井郡誌自然篇. 上高井教育会) 494
- 百溪祿郎太 (1925) 祖母嶽の動物. (祖母嶽. 百溪祿郎太) 36
- 溝江朝臣 (1982) 光岳と深南部の山々. (日本登山体系 9 南アルプス. 柏瀬祐之・岩崎二郎・小泉 弘編, 白水社) 267-299
- Nakano T, Ito T (2011) A list of the leech (Clitellata: Hirudinida) collection deposited in the Department of Zoology, The University Museum, The University of Tokyo. Univ Mus, Univ Tokyo, Mater Rep (90): 85-94
- 中村正雄 (1925) 蛭類. (新潟県天産誌. 中野財団) 614-615
- 中野隆文 (2013) 東アジア産巨食性ヒル類の多様性研究. 日本動物分類学会誌 34: 2-10
- 南紀生物同好会 (1979) ヤマビル. (わかやまの生物. 帯伊書店) 130-131
- 日本野生生物研究センター (1989) 1988 年度千葉県ヤマビル生息状況実態調査中間報告書
- 新美 利 (1979) 古山・宮山周辺の小動物. 伊良湖 (11): 14-15
- 新美 利 (1980) 泉福寺・山田・村松とその周辺の小動物. 伊良湖 (13): 12-13
- 西丸震哉 (1966) ひる. (山の博物誌. 実業之日本社) 138-141
- 西瀬英一 (1934) 大雲取・小雲取越へ. (南紀風物誌. 竹村書房) 131-177
- 大野正男 (1975) 千葉県産ヒル類概説. 千葉敬愛短大生物研究会々報 (7): 41-48
- 大野正男 (1981) 房総の動物. (房総の自然. 千葉大学教養部総合科目運営委員会) 143-177
- 大野正男 (1983) 日本産主要動物の種別文献目録 (12) ヤマビル (1). 東洋大学紀要教養課程篇 (自然科学) (27): 131-142
- Oka A (1910) Synopsis der Japanischen Hirudineen, mit Diagnosen der Neuen Species. Annot Zool Japon 7: 165-183
- Oka A (1930) Sur une variété de l' *Haemadipsa zeylanica* s'attaquant aux Oiseaux. Proc Imp Acad 6 (2): 34-36
- 岡 睦夫 (1978) ヤマビル秋田県にも生息す. 生物秋田 (22): 10-12
- 岡 睦夫・鈴木典男・福井 仁 (1981) 俎山周辺のヤマビル. 生物秋田 (24/25): 1-4
- 岡本綺堂 (1995) 綺堂むかし語り. 光文社文庫
- 小野蘭山 (1805) 本草綱目啓蒙三十六卷. 林吉兵衛・大野木市兵衛・須原屋善五郎
- 齊藤琴子 (1982) 赤沢林道の山蛭. 植物手帳 (187): 10
- 佐々木忠次郎 (1904) 人體の害蟲. 雙輪閣
- 佐藤潤平 (1940) 南秋田郡動物一覧表. (南秋田郡誌第一輯. 南秋田郡教育会) 99-113
- 里見哲夫 (1963) 妙義の山に生きるもの. (妙義山: 奇岩の山. みやま文庫) 161-182
- 仙波 治 (1974) 動物相一般. (自然環境保全地域候補地学術調査報告 (烏帽子岳), 岐阜県) 5-8
- 篠岡の自然編集委員会 (1981) 篠岡の動物目録. (篠岡の自然第一集 動物編. 小牧市立篠岡中学校) 118-145
- 白柳秀湖 (1914) 強者弱者. 東亜堂
- 杉山直人・坂庭浩之 (2010) 群馬県内のヤマビル分布状況 (2009 年). 群馬県立自然史博物館研究報告 14: 145-148
- 高塩 修 (1982) 昭和 57 年度夏季研究大会報告 5 班報告 水生昆虫の調査. 會報 (茨城県高等学校教育研究会生物部) (42): 55-58
- 高山館 (1919) 日本アルプス白馬嶽登山案内. 梅津書店
- 武田久吉 (1952) 丹沢の自然界. (丹沢の山と溪. 山と溪谷社). 6-16
- 谷川士清 (1830) ひる. (倭訓栞二十五卷. 成美堂)
- 徒登山岳会・山の仲間山椒魚 (1981) 上信越国境山群. (日本登山体系 2 南会津・越後の山. 柏瀬祐之・岩崎二郎・小泉 弘編, 白水社). 242-279
- 塚本閣治 (1944) 丹沢山塊. 山と溪谷社
- 内田 茂・小野久七 (1915) やまびる. 普通動物図説. 戸取書店
- 植村政勝 (1774) 本朝奇跡談. 村上治兵衛
- Whitman CO (1886) The leeches of Japan. Q J Microsc Sci 26: 317-416
- 渡辺隆一 (1968) 内浦山の動物調査. (内浦山における植生調査. 吉田治編, 千葉県農林部林務課) 54-62
- 渡辺三郎 (1976) 蛭とマムシと雷. 山脈 27(4): 22
- 山中征夫 (1999) 房総丘陵のヤマビル. (房総の自然と環境. 千葉県自然保護連合) 160-163
- ヤマビル研究会 (2017) <http://www.tele.co.jp/ui/leech/index.html> (2017 年 11 月 24 日参照)
- 吉葉繁雄 (1994) 各地で蔓延中の山蛭バイオハザードの諸問題—南房総での環境医学的追跡を中心に—. 平成 4・5 年度科学研究費補助金一般研究 (C) 研究成果報告書
- 吉村昭雄 (1976) ヤマビル. (母と子のための奈良県の動物. 奈良新聞社) 33-34
- 結城実誠 (1944) 山ビルの難. (昆虫と子供. 京都印書館) 152-155
- 結城実誠 (1960) 政所のヤマビル. (滋賀の自然. 滋賀県科学教育協会) 199-200